

地方文学館・徳田秋聲記念館の現在

藪田由梨
(徳田秋聲記念館学芸員)

徳田秋聲記念館は、平成十七年四月に開館し、今年で九年目を迎える個人文学館である。明治・大正・昭和の三代を小説一筋に生きた、自然主義文学の大家、徳田秋聲を顕彰するため、彼の郷里である石川県金沢市その生家ほど近い場所に、金沢市により設置された。

同市には秋聲のほか、昭和三十年代から地元でそう呼び慣わされるところという、金沢の三文豪「泉鏡花」と「室生犀星」がおり、それぞれ生家跡に記念館が建っている。また、文学に限らず記念館（相当地施設）という意味では、次に挙げる全十八施設がさほど遠くない位置関係で金沢市により設置され、広く歴史と伝統文化をハード面から保存・継承するとともに、県内外に向け、それらを重んじる街「金沢」という性格付けのアピールにも大きく寄与している。

- ① 金沢市立中村記念美術館（昭和41年）
- ② 金沢市立安江金箔工芸館（昭和49年）
- ③ 寺島蔵人邸（昭和49年）
- ④ 金沢くらしの博物館（昭和53年）
- ⑤ 金沢市老舗記念館（平成元年）

- ⑥ 金沢卯辰山工芸工房（平成元年）★
- ⑦ 金沢ふるさと偉人館（平成5年）
- ⑧ 泉鏡花記念館（平成11年）
- ⑨ 金沢湯涌夢二館（平成12年）
- ⑩ 金沢蓄音器館（平成13年）
- ⑪ 前田土佐守家資料館（平成14年）
- ⑫ 室生犀星記念館（平成14年）
- ⑬ 金沢21世紀美術館（平成16年）★
- ⑭ 徳田秋聲記念館（平成17年）
- ⑮ 金沢文芸館（平成17年）
- ⑯ 金沢能楽美術館（平成18年）★
- ⑰ 金沢湯涌江戸村（平成22年）
- ⑱ 鈴木大拙館（平成23年）

※（ ）内は開館年

※運営は公益財団法人 金沢文化振興財団（指定管理者）/平成25年現在。★印は公益財団法人 金沢芸術創造財団（同上）。

金沢城址公園、兼六園をはじめ、最近では現代アートを牽引する金沢21世紀美術館などが全国的にもその名を馳せ、新旧文化の共存する一大観光都市としての「金沢」の認知度は急激に上昇しているようだ。そしてそう書けば、文化を育み保存継承していく土壌に驚くほど恵まれ（実際その点に関しては疑う余地がない）、その象徴であるところの各施設とも活動は順風満帆であるかのようにも受け取られかねない。が、一方で、その内実必ずしも順風満帆とばかり言えない一面を抱えている。

それはすなわち、公的施設につきものである日々の利用者数の問題である。おそらく金沢市独特の悩みとして、これだけの施設が存在することを魅力に観光客を誘致しながら、これだけの施設が近接して存在することでかえって熾烈な集客合戦を喚起しているという現状がある。観光客とすればだいたい2〜3日の旅行日程において、さてどの施設から回ろうか——言い換えれば、どの施設を後回しにしようか、というプランニングそれこそが、一見して地味な幾つかの施設にとつては命取りとなるのである。

市としてはそういった孤立を防ぐため、共通観覧券（図1）や「カルチャーポイントサービス」（図2）という前掲の施設を繋ぐ方策を練ってはいるが、そういった措置のうえにも、充実した展示や催事の企画立案といった各館の自助努力だけでは賄えないほどに競争が加熱していることは、その施設数だけ見ても容易に想像できるのではないだろうか。そしてそれは、各館それぞれの性格や内的熱量、外的人気度という根本的な要素に加え、「金沢」という街全体においてどういった地位を獲得し得るか、という今になって改めて各館が向き合うこととなった非常に大きな課題であるとも言える。

（図1）共通観覧券

1日・3日・1年間パスポートの購入により、各施設を効率的に観覧することが出来る。各施設受付にて案内・販売している。

（図2）カルチャーポイントサービス

各施設1回観覧ごとに1ポイント。集めたポイントに応じて、各館オリジナルグッズなどの記念品と交換できる。

とはいえ、良き同僚でありライバルでもあるところの各館同士、うまく連携して相乗効果を生むことが最善であることは言うまでもない。その取り組みのひとつとして、共同展・巡回展の類が推奨され、これまでも当館を含めいくつかの施設で実践されている。しかし、施設規模の大きな金沢21世紀美術館を除き、おしなべて各館学芸員一人という人員配置の中、当館では年に三回、多いところでは五回六回と開催される企画展のサイクルのなかにそれらを組み込んでいくのは、正直なところかなりの体力を要する。通常では一二年ほど前から相互に図り、計画的に企画・遂行していくべきものであり、県外の施設に企画展開催二ヶ月前によりやく資料借用の依頼をして驚かされているような現状で、積極的に連携を計っていくことの負担の大きさにまず第一歩が踏み出せない。

また、それに加えて常に活動している館としての魅力をPRするため、ホームページ上でのブログの開設、フェイスブックへの参入のほか、文字通り企画展の合間を埋めんばかりに、講演会、コンサート、朗読会、文学・歴史散歩その他、各館から競うように次々とイベント事が繰り返されている。その結果、人の動く週末を狙えば当然日程が重なることも多く、連携どころかこれではまるで入館者の奪い合いといった本末転倒な事態ともなっているのである。

そしてそういったイベントのなかには——これは自戒も含めて——果たして本当にその館で催すべきなのか、と、そもそもその開催の意義を問われるものも少なくない。もちろん、入り口はなるべく広く、という考え方も否定出来なければ、各分野とのコラボレーションがたとえ当初はこじつけであっても、その顕彰対象にとつてまったく無利益であるとも言えない。しかし主催する側として、対象の

本質を歪めてはいないか、と折に触れ葛藤することもまたしばしばである。

たとえば公共施設の活発化に有効なセオリーとして、「子ども」層の獲得、ひいては親世代への拡充ということとはよく言われるが、すべての館に該当するかどうか。というのは、当館のケースで言えば、秋聲作品それ自体が完全に大人向けのものであり、その世界を子どもたちに開いていくということが大変困難な作業であるからだ。と同時に、秋聲文学の魅力を伝える者としての抵抗もある。過去に参加した研修のなかでこうしたことが議題に上ったとき、海外の某詩人の文学館で、同様に作品世界は大人向けであるけれど、詩の言葉を分解し、再構築するという作業を「遊び」のなかで子どもたちに伝えるというワークショップの実施例の紹介を受けたことがある。当然のことながら、まったく同じことをやるべき、出来るはずだ、といった意味でなく、見方を変えればいろいろな切り口がある、という一例の紹介に過ぎず、それを頭から拒否することが学芸員としての怠慢であると言われれば否定出来ない。にもかかわらず、やはりどこか腑に落ちない部分が残ったのは、この館でやるべきか、という、ことによればまったく個人的な、主観的な抵抗感によるものだ。

あらゆる角度から対象を照らすべき、との思いと、今は触れなくていいという世界の存在が許されるはず、との思いが激しく交錯するなかで、秋聲記念館でこそやるべきことは何か、という問いを常に抱えながら、需要と供給のバランスを計っている。

そういった面から言えば、明確な需要にひとつ答える形で、「偉人教育」への参画ということが挙げられる。郷土出身の「偉人」た

ち、「三文豪」をはじめ、文学に限らず各方面で活躍した彼らの業績についての学習を推進する市の方向性に則り、学校の要望に応じ、また館の側からも積極的に働きかけて市内小中学校に出前授業に赴くなどの活動を行っている。「偉人」教育であるので、極力「作品」を噛み砕くという方向性でなく、郷里の生んだ作家・徳田秋聲という「人間」を紹介するという手法でもって、ジレンマを解消しつつ、だ。当然、紹介させていただける機会はひとつでも多いほうが良い。それを拒否するという選択肢は有り得ない。そして、そういったご縁のなかで、秋聲作品を子どもにどう教えればよいかかわらない、と先生方からご相談いただくことも多くなった。その結果として、今夏敢えて、秋聲が若かりし頃、下積み時代に残した子ども向け作品だけを集めた企画展の開催(図3)と『秋聲少年少女小説集』(図4)の刊行を決めた。当然、自然主義文学の大家・徳田秋聲の本領でなく、本来館で行うべきことであつたかという迷いといささかの主張を籠めて、企画展には「徳田秋聲らしからぬ! しゅうせいとこどもむけよみもの展」という捻くれたタイトルをつけた。

分かる人だけ分かればいい、好きな人だけ来ればいい、といった「待つ」文学館の時代はもう終わったのかもしれない。地域の差や、私設・公設の別等その館の設置事情・性格によりさまざまな考え方がある中で、少なくとも金沢市における文化施設は、現在、その在り方なり方向性を厳しく問われている。そして、その方向性を考えるための大前提として、ひとつひとつが決して大きくはない個々の館がそれぞれ何からも独立した点でなく、あくまで「金沢」という土地に根差し、かつ他の施設との関係性のなかで一体どの役割を担

(図3) 企画展「徳田秋聲らしからぬ! しゅうせいとこどもむけよみもの展」チラシ



徳田秋聲らしからぬ!
～しゅうせいとこどもむけよみもの展～

【会期中無料】
2013.7.13 sat - 11.4 日曜日
徳田秋聲記念館

Yokka Shiroi Kinokuni Museum
〒920-0801 石川県金沢市1-7-10 電話 076-221-4400 FAX 076-221-4500
開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで) 休館日 7月14日(祝日) 8月11日(土) 9月12日(土) 10月12日(土) 11月12日(土) 12月12日(土)

(図4) オリジナル文庫第7弾『秋聲少年少女小説集』(840円)館では絶版の相次ぐ秋聲作品普及のため、おおよそ年に1冊のペースでオリジナル文庫として代表作その他を刊行している。館のみの販売。通販可。



秋聲少年少女小説集
徳田秋聲 Shunpei Tokuda

徳田秋聲らしからぬ!
よき大人のための文学で知られる秋聲の、若き日の子ども向け作品13編ほかを収録。

徳田秋聲記念館文庫

うべきかを改めて意識する必要があるのだと考える。

そしてそう考えたとき、前言と矛盾するようだが、街に唯一の公共施設ならまだしも、これだけ文化施設の点在する土地にあつて、不相応なことはそれ相応の施設に委ねてもよいのではないかと、といった思考に立ち戻りもする。無理に形を歪めて手を繋ぎ、すべてを受け容れ、すべてに開こうとしていくのでなく、あるいはそういった連携の形もあるのではないかと。それを怠慢と見せない努力こそ、いま各館がすべきことなのではないのだろうか。

たとえば各施設が挙つて子どもを対象とした企画に知恵を絞るなか、やはり当館の性質としてそれは難しいと主張するためには、それをそうと納得させるだけの積み重ねが必要なのだ。それは子ども向けの企画に限らず、あらゆる方向性において、なるほどこの施設では可能だが、この施設ではそぐわない、と内部の人間でなく、外部から判断してもらえような独自のカラーを具体的な形で、施設の林立するこの地であるからこそより強く打ち出していかなばならない。

平成二十六年春、北陸新幹線開業に向けて、各方面で金沢市の取り組みは始まっている。そんな中にも文化都市「金沢」を支える最先鋒としての文化施設であり、同時に全国に唯一の記念館でありたい。そのためには、いつまでも創設理念だけ掲げていたのではもはや間に合わない。これまでに築いてきた、そしてこれから独自の方法で築き上げていくオリジナルの文学館像が必要だ。その上で、これだけの施設があればこそ、揃つて同じ方向を向くのではなく、それぞれの個性を銘々最大限に引きだし、全方向で補完し合える関係こそ真に意義ある連携であり、「金沢」という街全体を唯一とする

武器となるのではないだろうか。

明治四十年前後、秋聲をはじめとする自然主義文学作家たちの隆盛からおよそ一〇〇年、徳田秋聲が読まれる時代は終わった。どんなに庇つてみたくとも、書店からは次々とその代表作の姿が消えつつあるのが現状だ。一方で、当時自然主義文学勃興の陰に隠れたという『三文豪』のひとり、泉鏡花の現代における勢いはすさまじい。映画、舞台、絵画と文学に留まらぬ多方面へとその影響力は及び、若いアーティストにも創作のインスピレーションを与えている。それに引き替え、鏡花だけでなく、他の作家連、他の分野と比較しても、秋聲は起爆力のあるタイプではない。それこそ代表作『黴』のように静かに地を伝い、じわじわといつの間にか心の中を侵蝕して一度侵されたなら二度と除去しきれない、地味だが根深いのがその魅力の本質である。まつりごとに不向きな秋聲は秋聲らしく、ごく身近な低いところから地道にしかし着実に胞子をばら撒き、そしてもう一〇〇年後に必ずその名を伝えるために、徳田秋聲記念館の葛藤し模索する現在が在るのである。

(やぶた・ゆり)